

二〇一二年十二月 山陰研究 第四号 抜刷
島根大学法文学部 山陰研究センター

翻刻 手錢記念館蔵 『烏帽子折屏風』

小川陽子

翻刻 手銭記念館蔵 『烏帽子折屏風』

小 川 陽 子
(松江工業高等専門学校)

摘 要

手銭記念館蔵『烏帽子折屏風』は、幸若舞曲「烏帽子折」の絵入り本を屏風に仕立て直したものである。その紹介を兼ねて、全文を翻刻する。

キーワード・屏風、奈良絵本、手銭記念館

はじめに

大社町で三百年あまり続く手銭家は、江戸期に酒造業を営み、貴重な典籍や絵画その他の美術工芸品を多数所蔵している。このたび紹介・翻刻する『烏帽子折屏風』もその一つである。ただし、いつ頃どのような経緯によって同家に収められたのかは定かでない。

当該屏風は六曲一双で、奈良絵本を屏風に仕立て直したものである。もととなった奈良絵本の題名は明記されていないが、その内容から、幸若舞曲「烏帽子折」を絵入り本としたものと判断される。幸若舞曲「烏帽子折」は人気の演目であり、読み物としても人気が高かった。その絵入り本としては、京都大学附属図書館蔵本、実践女子大学蔵本、

都立中央図書館加賀文庫蔵本などが知られている。

当該屏風は、右隻左隻ともに三段にわたって奈良絵本が貼られている。一枚の欠けも錯簡もない逸品であるが、各曲の左右端にあたる部分が一部判読できなくなっている。このたびの翻刻にあたっては、「(一行判読不能)」との形で示した。

挿絵は基本的に各面の三分の二から下半分に描かれ、上部に物語本文が書かれている。当該屏風の精細な画像は鳥根大学附属図書館デジタルアーカイブにて公開予定のため、詳しくはそちらを参照されたい。

【参考文献】

・『京都大学蔵 むろまちものがたり』第2巻(平13・臨川書店)

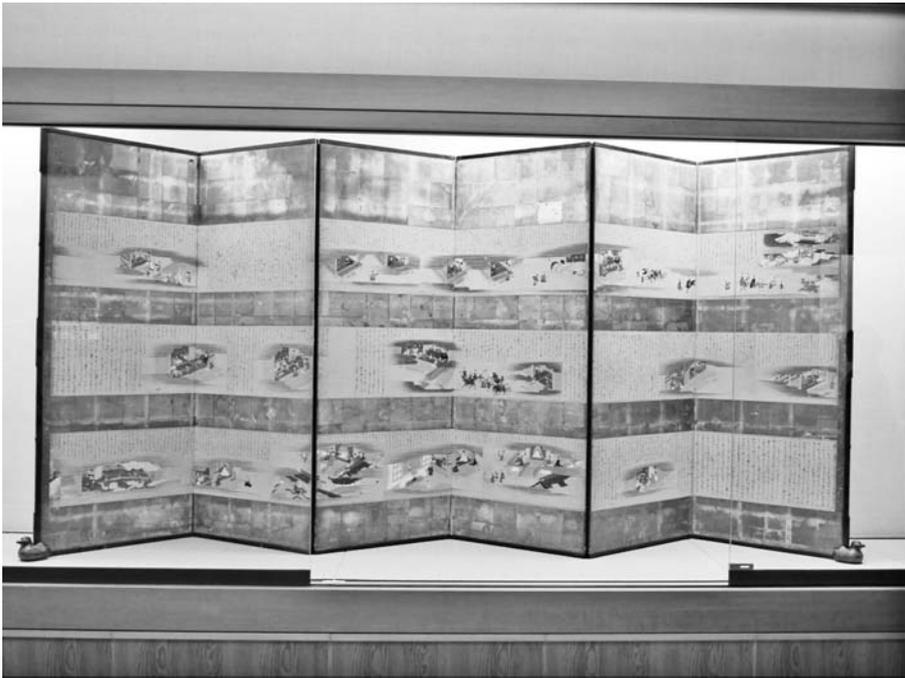
翻刻 手銭記念館蔵「烏帽子折屏風」(小川陽子)

・宮腰直人氏「語り物と絵画の交錯―絵入本『烏帽子折』小考」(『国文学解釈と鑑賞』第74巻10号 平21・10)

〔付記〕

貴重な御所蔵品の調査をお許しくださった手銭白三郎氏、手銭裕子氏、調査にあたりさまざまご教示を賜った手銭記念館学芸員佐々木杏里氏に記して厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」(研究代表者・要木純一)による研究成果の一部である。



右 隻



左 隻



(右 1)

翻刻凡例

一、底本の変体仮名は、すべて現行の字体に改めた。
 一、漢字については、できるだけ底本の字体を尊重して、印字可能な範囲で底本の字体の再現を試みた。

一、判読不能の文字がある場合は、その個所を■で記した。ただし、一行全体が判読不能の場合は、「（一行判読不能）」と記した。

一、底本の誤写・誤脱と思われる箇所もそのままとした。

一、奈良絵本の丁移りと曲の境とが必ずしも一致しないため、便宜的に、各曲の右上段から順に、曲ごとに（右1）～（右18）、（左1）～（左18）の通し番号を付した。

翻刻

そも／＼比はあんけんくわんねん三月ちうしゆんにみなもとのうしわか殿くらまの寺を御出ありけふよろこひにあふみなるのちのしゆくにてきちしのふたかにゆきあはせたまふその日のとまりはか、みのしゆくさちしかやとはきくやなりか、みのしゆくゆふくんともさつしやうかまへきちし殿をもてなすされともさちしよに有かほなるふせいにしゆんのさかつきめくらしきやくのさかつきとはせければその、ちはさかもりになるあらいたはしやうしわか殿は人めをつ、ませ給ふあひたきり（右1）（一行判読不能）た、すみ給ふこ、に平家のさふらひ大しやうにけんもん大郎よりかたあく七ひやうへかけきよひたの三郎左衛門はやむまにのつてはんはのしゆくよりもふれてとをりけるやうはこのろしを十六七なるせうしんのとをらせ給ふ事のあらはみやこへ御とも申てのほりたらんするともからに上下をゑらますくんこうある

へしとふれてその日にみやこへとをりけりうしわか殿きこしめしあらくちをしやこのきにてあるならはなにしくらま寺をは出けるそやそれはつしやうのおうちひろしと申せともとしにもたらぬうしわか身のをきところのなき事こそなによりもつてくちをしう候へさりなからた、いまはちことこそふれて候へおとことふれてあらはこそしよせんおとこになりてくたらはやとおほしめしやとの下女をちかつけこのへんにゑほしおりはし候か下女うけたまはつて今日みやこよりくたらせ給ふ人のこれにてゑほしのおたつねさふらふかさりなからあのみかひに見へたるたかもかりのうちこそ五郎大夫と申てゑほしのしやうすにてさふらふおたつね候へうしわかなのめにおほしめしもかりのうちへたつね入あんない申さううちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はすきちしのふたか■としても（右2）くたるくわしやにて候かゑほしのしよまふにて候大夫きいてうしわか殿をしやうし申くわしやとの、めされうするゑほしは大さひさうかさひかしんせいやうかたうせいやうかいかやうなるをめされうそうしわか殿はきこしめしあらくちをしやゑほしはた、くろければくろいとばかり心得たるにあまたのなのありけることよなにとなおらせうなあふおもひいたしたりわれらかせんそはひたりおりをめさる、とうけたまはりおよへは人かすならぬうしわかもひたりへおらせきはやとおほしめしなふ大夫殿このくわしやかきうするゑほしはそれなる大さひにつふのちつとあららかなるをひとくせみくせませひなかにあひをあらせくしかたをいか／＼と一ため／＼てひたりへおつてたひ候へそのとき大夫事のほかにらはをたてされはあのやうなるけらふに物をこのますればわか身のくわかいのほともしらすこともかたしけなやひたりおりをめされうする人はそも一とせおはりの国のまのうつみにてうせ給ひしよしともその子にて御座あ

るちやくしあくけんたよしひら次なんともなかなんよりとも四郎はあゝ御さうし五郎はとをたふみのかはの御さうしのりより六は大このときやうのきみ七はおんしやうし(右3)(一行判読不能)あたらせたまふたう寺くらま寺に御さあるうしわか殿さまこそめされうするやはわ殿はらかやうに吉次かともをするくわしやかひたりおりをきうすることおもひもよらぬしよまふかなうしわかおかしくおほしめしおほせはさにて候へともおくへまかりくらふすせきくゝとまりくゝにてひたりおりをきたるよと人のとかめのあらんときみやこのやとにふるきゑほしのありつるを所望してきてさうかひたりおりもみきおりも此くわしやはしらぬなりかゝるむつかしきゑほしをせきやにあつけ申といふてうちすてゝとをるならば御身のなんもあるましきわつはかとかものかるへし大夫きいてあらおもしろのこととはつかいやいかさまこれはやうある人よとおもひ一人は申までといふてやかてひたりへおりすましてまいらするさるあひたうしわか殿このゑほしをとりまわし御らんしてよひゑほしにては候かひとつのなんか候大夫きいてちになんか候か候かさひにくせか候かひなかくしかたこゆい所いつくになんか候そおこのみ候へやかておつてまいらせうしわか殿はきこしめしいつくになんもなひゑほしにては候かおりふしかわりをもちあはせざるかひとつのなんにて候大夫きゝ、あらくとくゝのくわしや殿か申ことやあの吉次は一年に一と二年にふたゝ、ひおりのほりするそのともしてくたるくわしや殿なればこゝろやすくおもはれよくわしや殿かおく花むけにとらせうやなうしわか殿はきこしめしにくい大夫かとらせことはかなうしわか世にいつる物ならはい■のきすともなるへきことは(右4)なればたちをとらせてゆかうすこれは千五百里のようしんもかくるかたなをとらせてゆかはやとおほしめしけんし御ちう代のこんねん

とうの御こし物を取いたしなふ大夫殿このかたなをゑほしのかはりとはしおほしめされ候なゑほしのかはりにはみやうねんの夏の比輿よりもよきむまをようい申さういとま申て大夫殿とて宿にかへらせ給ふそのゝち大夫女はうをよひ出しこのとし月かゝるけさいをつかまつりしんみやうをたすかることを佛神三ほうもふひんとおほしめさるゝによつてこのかたなをたまはる見たまへともこかねそみやこのまちにてこきやくしいちこの内をらくくゝとすきうする事の嬉しさはいかに女はうきゝ、なにと物をはいわすして大夫かもちたるかたなをたゝ、一め見てやかてさめくゝとなく大夫このよしみるよりもあらふしきの女はうの心つかいやおのこかたからまふけてよろこば、ともにはよろこばすしてわこせはなにをななくそ女はうきいていまは何をかつゝ、みさふらふへきさてはさきほとにゑほしおらせたまひたるくわしや殿はみつからかために三代さうおんのしゆくんにてこささふらふそれをいかにと申に御身のもたせたまひたるかたなはけんし御ちう代のこんねんとうと申かたなみつからをはいかなるものとおほしめすこれは一とせおはりの国のまのうつみにてうせ給ひしよしともの御うちかまたかためにはいもうとなりきみにはなれまいらせ身のをき所のなきまゝ、にこのしゆくにおちとゝ、まりめんほくなくはさふらへとも御身とちきりをこめことしは九ねんになりさふらふ九年のなさげにそのかたなをみつからにたへかしなふわかきみの■しうへとはるくゝおくりましゝゝにおく花むけにまいらせん大夫きいてともになみたをなかしふうふかいらふとうけつのわりなきいもせの中なればなにをかしむへきやかて女はうにとらする女はうなのめならずによるこうてへいし一くてう花かたにくちつゝ、ませこゆいをとりそへ吉次かやとにたつねい案内申内よりもたそとこたふるいやくるしうも候はすこのしゆくのをゑほし

おりか女はうにてさふらふかさきほとにゑほしおらせたまひたるくわしやとのに物申さんとてうちに入うしわか殿にあひたてまつりなふいかにわかきみつからをはいかなる物とおほしめされ候そこれは一とせこのきみの御とも申のまのうつみにてうせたりしかまたかためにはいもうとにてさふらふなんしの身にてもさふらは、御さいこの御とも申へきかたとひおんな(一行判読不能)(右5)(一行判読不能)にてはさふらへともすてかたきはいのちつれなくいまにならへこのしゆくにおちとまりめんほくなくはさふらへともこのしゆくのをゑほしおりにちきりことし九年になりさふらふ九年のなざけに此かたなを大夫に所望しわかきみのあふしうへとはるくおくりましますを一めおかみ申さんためにこれまてまいりてさふらふそやそれゑほしをきるにはこゆいをゆうてきる事さふらふこのゑほしをたまわれこゆいをゆうてまいらせんとはしけたやうにくもゑにさつとゆいあけ此ゑほしをめされておくへくたらせ給ひさとうひてひらをもようし十まんよきをいんそつし平家の人々を心のまゝにほろほしいま一と御代にた、せ給へいとま申てわかきみとて女はうはやとにかへるその、ちうしわか殿けんしの物多のかといてにらうとうにあひつる事のうれしさよそれゑほしをきるに二人のおやをとるならひのあると申かさてもうしわかはたれをゑほしおやにとらふそあふおもひいたしたりわれらかせんその八まん大郎よしいへは七さいの御とし八まんへおまいりあつてやはたにて御けんふくめされ八まん大郎よしいゑとなのらせ給ふとうけたまはる次なんにあたらせ給ふはかもにてけんふくめされかも二郎となのらせ給ふ三なんにあたらせ給ふは大津のしんらへおまいりあつてしんら三郎殿となのらせ給ふとうけたまわるそのことくうしわか(右6)かたおやをほうち神八まんをとり申さうすいまかたおやには此とし月すみなれ

しくらまの大ひたもんをとり申さうすたちはたもんのつるきかたなは八まんと心ざしなひのはしらにたてをき九のもとゆいをみつからめされ御くしをはやしあつてへいしのさけをみつからうつしたちのまへにも三々九とかたなまへにも三々九とをたむけあつてその、ちわか身もおめしありさてもこよひのきやくしんかなをは何とつかうそけみやうはけん九郎しつみやうはよしつねと申なりとひとりことをしたまひてしきのゆわひをとけさせ給ふあらいたはしやこのきみ御代か御世にて御けんふくましまさはあめかしたのしよさふらひまいりほうこう申へきかうき世にすむならひとてよふもこたふるもた、一人の御けんふくめてたき中にもさきたつ物はなみたなりあけ、れはか、みのしゆくゆふくんともこんときちしとのかはしめてつれてくたりししよくわんの見めのいつくしさよた、しと申にこ、ろかふつきやうにて夜ともにひとりことをして大郎の八郎のたもんの八まんのあれをめし候へこれおめし候へと夜とともひとりことをしつるおかしさなんととてとりくこそわらひ(右7)けれその、ちうしわか殿ゑほしたためつけてめされ吉次か前にかしこまつておはします吉次きつとみていやくわしや殿はゑほしをめて候かそれゑほしをきるには二人のおやをとるならいのあると申かさてくわしや殿はたれをゑほしおやにめされ候そうしわか殿はきこしめしさん候人々のゑほしめしつれたるかうら山しさにこ、ろならすにきて候へともいまたなをはつかす候とてもはやてんともちともち、は、ともはんしはたのみ申うゑいかやうにもなを付けてめしつかはれ候へ吉次き、あふその其迄はちからおよはすけふよりして御身かなをはきやうとうたつつけそやうかしこまつて候た、しと申に御身かやうになまめひたるわかものをかちにてろしをつれんするか大事けふよりして吉次かたちをかついておくへくたり候へそれ

いなどおもひなはこれよりみやこへのほられ候へうしわか殿はきこしめしこれかたとへに申かや世はまつせにおよふといへとも日月はいまたちにおちつてんしやうのからにしきくたつてんしやにまはる事なしなにとしてけんしのちやく／＼かうきよをわたる吉次かたちをもたふそあらはかなのこゝろやきちしかたちをもたはこそめいとにましますち、よしどもの御はかせをもつにこそとおほしめしひけきりの御はかせをわつそくにかけ吉次かたちをかついておくへくたせたまひけりなみたのあめはたまかつらむかしはかけて見し物を吉次やう／＼くたるほとにみの、くににきこへたるあふはかのしゆくにつくかのあふはかのちやうしやの中のでいには大みやうかうけの人たにもとま(右8)りたまはぬに吉次かとまるい■れはよしどもの御ために一けん四めんにひかりたうをたてられしときかね五十りやうむま十ひきくわんしんにまいるなさけのふかき物なれはとておりのほりはと、まり候かのあふはかのゆふくんともさつしやうかまへきちし殿をもてなす吉次は代にありかほなるふせいにてきやうとうたはなきかこなたへまいりてしやうらうさまの御まへにておしやくを申せあらいたはしやうしわかとのいつしやくとりならひたることは御さなけれともときよにしたかうならひとておつとこたへてめざる、にまことにとりならわせたまはねはてうしのさけをゆんでめてへさつ／＼とこほさせたまふ吉次きつとみて大のまなこにかとをたてふかくの物のかな人のおまへのおしやくをはさやうにたまわるかきつくわいなりまかりたてとしかるうしわか殿はきこしめしさん候われらさいこくかたのしよ山寺のしゆとしゆつしの御とも申ししき(右9)(一行判読不能)■さやうのほうこうこそしならひて候へふしのおまへをはこれかはしめて候によきにをしへてめしつかはれ候へきちしきいてやあさやうのことはわたく

しにて申せこれは人のおさしきそた、まかりたてとしかるあらいたはしやうしわか殿時ならぬかほにもみちをさつとちらしききすこ／＼とた、せ給ふこ、にはまちどりのおつほねちやうへまいらせ給ひなふきみきこしめされ候へいままいのきやうとうたとやらんかしうたにもふかぬふゑをふくけにさふらふそ世にありかほにふゑをさいてさふらふきみのちやうはきこしめしあらわこせはどうかいたうのなをりを■(右10)■それけいはぬしをさけすていの中のはちすしんりんといひしらざる木竹ほくせきにたとへたりいかに吉次かつれたるきやうとうたと申ともふけはこそふゑをはさすらんめてうし一つしよまうせよざるあひたはまちどりのおつほねうしわか殿の御そはちかくまいりなふかみよりの御しよまふにてさふらふそ御身のこしにさ、せ給ひたるそのふゑひとてあそはせうしわかとのはきこしめしなにこのくわしやにふゑふけと候哉やまたけにめをあげたるくさかりふゑにて候をあつまのたひのとせんさにもちはもつて候かいまたふく事は中／＼おもひもよらすにて候吉次きいてやあかみよりの御しよまふはなんちかためにはしやうかいのおもひ出にてはなきかたとひ木こりふへにてもあれ又くさかりふゑにてもあれなと(右11)てうしを一てふき申さぬそうしわかとのはきこしめしこれは一たんのれいきまてさらはひとてふいて一この思ひてにきかせはやとおほしめしは、のときわのよとのつのみた二郎かもとよりもかいとらせたまひたるこうほう大しのせみおれなれはいつくしきともなかく／＼にあふ申はかりはなかりけりこのふゑをとり出しかんこしやうさくちうろくけくとて八つのかたくちに花の露をしめしたうはんしきにねをとつてくもゑにさつてふきあけはんしをしつめてあそはしたりちやうこのよしをきこしめしおもしろのふゑの音やからはしの中しやうとの日本一のふゑふきふし一けん

其ために奥へおくたりましますかこのしゆくにおつきあり夜ともふゑをあそはせしおんせいさしほとひやうし物あひすんたるところはからはし殿のふゑにはみきわまさつておほへたりこれほとのおゑにてさためてかくはふくらんにかくひとあそはせみなもときこしめしとでもてうしをふくうゑふかはやおほしめし一こつてうに(右12)ねをかへしゆつこんらくをあそはすやかてをししかへしくわいはいらくをあそはすちやうこのよしをきこしめしおもしろのふゑの音やあらおもしろのかくのなやくわいはいらくといふかくさかつきをめくらすたのしみけこもしやうこもをしなへてさけをのめとのふゑの音やしかるへくはあすはかり吉次とのかと、まれかしきやうとうたにふゑをふかせくわけんしてあそははやくみ^{ちやう}の○はきこしめしあらおもしろのふゑさふらふやみつから一つたまはつてた、いまのふゑのどのにおもひさし申さう吉次きいていかにきやうたいいうちのものちかうまいりて物をきけされはそれかしかみやこにて申せし事はこれそとよふゑをはふかすともこしにさせまひはまわすともつねにあふきをもと申せし事はこれそとよあのみやうとうたかふゑふかぬ物ならはしやうらうさまの御さかつきをなにとしたまはらふそそれ一つたまはつてけんせのみやうもんこしやうのうつたへにせようら山しの京藤大とさかつきをうらやみしはことほりとこそきこへけれその、ちうしわか殿の御さかつきをかなたこなたへめくらし夜もふけ、れははまちとりのおつほねさかつきをおさめみなつほねへそかへられけるさるあひたはまちとりのおつほねこせたちをあつめいせんにふゑふひたるきやうとうたやらんはみめもいつくしきものふゑもしやうすた、しと申におかしきことを申つるものかなそれ笛(一行判読不能)(右13)天人の一ゑかくしこうほう大しのせみおれさてわかつてのふゑにはうちやまとしま竹よ

り竹なんと、こそ申せまたこそしらねくさかりふゑとはあふむかしの人は心にいたりかなふしてふゑにてくさをかりたればこそくさかりふゑとは申つらんおかしさなんと、ととりへにこそわらわれれきみのちやうは物こしにてきこしめしあらわこせたちはそのくさかりふゑのいわれをしつてわらふかしらてわらふかひやくやうをしつたりとも一やうをしらすはあらそふことなかれと申たとへのさふらふそやいてへそのくさかりふゑのいはれをかたつてきかせ申さうむかしわかつてふにようめいてんわうと申せしは十六にならせ給ふまできさきのみやもましまさずあるとき天上人さしあつまつてあふきを六十六ほんおり六十六本にゑ女はうをか、せくにへゑまはしいかなるしつのためしつの子なりともこのあふきのゑにたる女はうやあるいそき大りへまいらせよ一のきさきにいわふへしと日本國をふれらる、日本ひろしと申せとも此あふきのゑにたる女はうは一人もなくしてあふきはみやこへかへりけるか、りけるところにつくしふんこの國うち山といところに(右14)ちやうしや一人ありかのちやうしや四はうに四まんのくらをたてすめはしまのちやうしやと申せしを人の申やすきま、にまの殿とこそ申けれかのまの殿四十のいんに入まで子のなきことをかなしみうち山のしやうくわんおんにまいり申子をこそし給ひけれいまにはしめぬくわんおんのねかいのほともはやみちてほうしゆをたまわると(右15)(一行判読不能)御らんして御ちやくたいの御身となり七月のわつらい九月のくるしみ十月半と申にはさんのひほたいらかなりとりあけ見給へはたまをのへたることくなるひめ君にておはします御むさうによそへてたまよのひめとなつて申いつきかしたつきたてまつるあるときこのひめ十四のはるのころかのゑあふきのくたるにひきあはせて見てあれはものいうものとおもひなはあふきのゑかねたむへうに見ゆる

大りへ(右16) そうもん申たりければ御かとゑいらんまし／＼ていそき大りへまいらせよ一のきさきにはうへしとやかてちよくしたつちやうしやうけたまはつてたとひせんしにてもあれた、一人のひめなれはおもひもよらぬことなりとせんしをそむき申さる、御かとゑいらんまし／＼てそのきならばまの殿日のうちにけしのたねを一まんこく大りへそなへまいらせよそれかなはぬものならばひめを大りへまいらすへしとかさねてちよくしたちければちやうしやうけたまわつてこはいかにたとひ日かすをふるならばいかていのものをもとむへきかことさら日のうちにけしのたねを一まんこくなにとしてかいてもむへきそや(一行判読不能)(右17)(一行判読不能) しゃの女はうこれをき、なふまの殿いたうなさわきたまひそとよ御身十八みつから十四のあきよりもちやうしやのいんかうかうふつうちのけんそくなにわにつきてとほしきことはなけれどもかゝるものはときとしてくさはせにもあふやとてあのいぬいのすみにあたつてかやくらをつくらせとし／＼たねをとりあつめてをひたるか一まん石はそはしらす十まんこくもあるらんちやうしやなのめによるこふてさらはくるまをかされとて車のかすをかざつて日のうちに一万石大りへそなたへたてまつる御かとゑいらんまし／＼てしよせんた、まの殿はさて三國一のちやうしやてあり御かとゑいらんまし／＼てそのきならばまの殿しよつかうのにしきをもつてりやうかいのまんたらをはたいろに七なかれおりつけてまいらせよそれかなはぬ物ならばひめを大りへまいらすへしと■■ねての

■■したつちやう(右18)

しやうけたまわつてこはいかにしよつかうのにしきをもつてりやうかいのまんたらとやらんはそれはほとけたちのしやうとにてはすのいと

をもつておらせ給ふとうけたまわることさらわれらはほんふの身としかにかとしてはもとむへきそやあ女はうた、ひめを大りへまいらすへし長者の女はうこれをき、た、一人のひめなるを大りへそなへまいらせきよくろうきんてんのうてなのうちのすまゐをせはわか子とはおもふとも見んすることもかたかるへしゆふさは夜と、ものなこりをしみのくわんけんなりされともあかつきかたはまとろみたまふか、りける所にう山のしやうくわんおんちやうしやふうふまくらかみにたちよらせ給ひかにきくか長者御身かむすめはみつからに申子よなをしむ所もふひんなれはもろ／＼のほとけ立をしやうし申長者か中のていにてにしきをおるそちやうもんせようけ給て長もんするたなはたひこほしのおるひのおとはていほろ、これはさなからみのりなりはたいろに七なかれおりつけて長者殿の中のていにをき給ふ長者なのめによるこうていそき大りへまいらせけり御かとゑいらんまし／＼てしよせんた、まの殿はほとけにてましますやほとけのむすめをこひかねて十せんのくらゐをすへるともなにかはくるしかるへきとくらゐをおすへりまし／＼て(左1) 十六の春のころたとろ／＼とくたらせたまひけるほとに十八日と申にはふんこのくに、きこへたるはやうち山につき給ふさるあひた御かとはとある小家に一夜のやとをかり給ふやとの大夫御かとお見まいらせあらいつくしのせうしんや御身はさていつくの人そ御かとゑいらんまし／＼てみやこのものにて候さん候これはならばぬたひをうきくものとまりさためぬしゆきやうしやにて候大夫きいて花のみやこの人はなんのためにかゝるおんこくへはおくたり候そ御かとゑいらんまし／＼てほうこうのそのみにて候大夫きいてあらしやうのくわしや殿かほうこうこのみやこの大夫はちやうしや殿のししんにて候かこのとしになるまで子といふものをもたす候けふよりして子に

なり候へてんちをかうさくせんするとも又くわいせんをせうするともそれは御身のまゝさうよ御かとゑいらんましゝて御らんせられ候ことくやうりうの風にふけたることくにててんちおかうさくせんことも又くわいせんとやらんも中々おもひもよらぬ事にて候た、ほうこうならはとおほせければ大夫きいてそのうゑはちからおよはずさらはちやうしやに申さんとてちやうしやにかくと申ちやうしやきこしめされていそいて■てまいれうけ(左2)たまはると申て御かとをくそくしたてまつるちやうしやいてあひ給ひあらいつくしのせうしんや御身はいつくの人そ御かとゑいらんましゝてみやこのものにて候ちやうしやきこしめされてなをはなにと申さんろと申候ちやうしやきこしめされてさんろとは山のみち人なにははしめてきいたりおもしろひやなふいかにさんろ殿このちやうしやこそうしを千ひきもちたるか九百九十九ひきにはとねりかつきてかいさうかあれなるあめなるうしをはとねりかはつたとにくんでくさをも水もかいさうぬけふよりしてさんろ殿にたてまつるくさをも水をもよきにかうてたひ候へあらいたはしや御かとはこひゆへりやうしやうし給ひてあくればうしのくちをひき千人のとねりとうちつれてうしろの野へにいてさせ給ふか、りけるところ千人のとねりともはかりならひたる事なればてんてにかまをひつさけてかきよせくくさをかるいたはしや御かとはいつかりならわせたまはねは牛にうちか、りふゑ打ふいてましますむまははとうくわんおんうしは大日によらいのけしんとうけたまはるかけにやさありけるか人間は見しり申さねとちくしやうなれともいろふせいを見しりたるかとおほしくてくさをもはますつのをかたむけたをたれ御かとのふゑをちやうもんす千人のとね(左3)りともこのよしをきくよりもさんろ殿かふく物のなをはなにといふやらんよこふゑと申さうあふ

おもしろひそやさんろ殿くさはしかるなふゑをふけなんちかうしくさばかりてかけふそやうふけよといふほどに一同もくさをかりたまはすこれをもつてこそ夜ふけてこゝろすめるをはさんろのくさかりよるのふゑわかめかるはたこのうらわかくさかるはむさしのよわかめわかくさわかのうらよめいてんわうのこひゆへあそはすふゑをこそくさかりふゑと申なれこれはつくしの物かたりさてみやこには御かとうしないたてまつりくきやうてんしやう人さしあつまつてはかせをめさる、はかせまいりてうらない申こうする八月十五日にうさ八まんの御前にておはうしやうゑと申事をとりおこなわせ給へてんしやう人はきこしめしそれはさていかていの物にさすへきそはかせうけたまはつてさん候つくしふんこのくにうち山と申ところちやうしや一人ありかのものに御神事をつとめさせらるゝものならば御かとはみやこへくわんきよあつて天下はめてたかるへしとれいもんをひきて申天上人はきこしめしさらはつくしへししやをたてよとてちやうしやのかとにさか木をたつるちやうしやおりふしいてあひたまひこはなにといへるしさひそさん候こうする八月十五日にうさ八まんの御前にておはうしやうゑと申事をとりおこなわせ給へち(左4)やうしやきこしめされてそれはさていかていの物か入さうそさん候まつしきしやうこくしやうしんくわんみや人八人のやおとめ五人の神くらおとこまいりていとうのつゝみをうちさつゝのすゝをふりあけけいはあけむま御子のむらしゝてんかくとをつてのちやふさめさうよちやうしやきこしめされてあらむつかしけなる事やとてきんりきんかうをたつぬるにのこる物はみなそろへつれともかのやふさめとやらんにはつたとことをかくそのときちやうしや千人のとねりともをあつめもしなんちか中にやふさめはししつたるかとねりうけたまわつてかみたにもしろしめされぬにこ

めしなふみうちはなにをの給ふそ身つからはよしとものさいちよなり
 まんしゆのひめと申てわすれかたの(左9)(一行判読不能)寺のふも
 とに出家になしをき申なりさてこのあたりに一けん四めんにひかりた
 うをたてあみたの三そんをあんし申よしともあくけんたともなかつし
 三人の御ゑいにあらはし申なりもしもけんしのゆかりか、りにてまし
 まさはせうかうなんとあれかしなふあら心ふかのくわしやとのやみな
 もときこしめしのきの玉水ちりくくさつ、めともつ、まれすさてか
 くせともかくされすち、よといへるこゑをき、山ふきかほにうちほ
 ひいまはなにをかつ、むへきよしとは八なんときははらには三な
 んくらまのうしわか殿にて御さありけりわかきみをおかみ申せはし、
 てひさしくなり給ふよしともの御すかたを見まいらする心ちのありて
 なつかしさよとの給へはみなもとも二さいのとしはなれ申せしち、こ
 をはゆめともさらにわかまへすた、いまかやうにおほせらるればめい
 とにましますち、こせをおかみ申心ちのありてなつかしさよとの給ひ
 て御たもとにすかりつきふししつみてそなき給ふたかひにつきぬそ
 なみたよそのたもぬれぬへしきみのちやうははまちとりをめされ
 あれくうしわか殿をしやうし申御ゑいおかせ申せうけたまはると
 申て(左10)たち入御らんありければけにとやらんよしともあくけん
 たともなかつし三人の人々を御ゑいにあらはし申なりうしわかなのめ
 におほしめししやうかうらいをあそはすならはぬたひの御つかれらい
 はんひきよせまくらとさためてすこしまとろみたまひけりか、りける
 ところによしともあくけんたともなかつし三人の人々はまつくろによ
 ろひうしわか殿のまくらかみにたちよらせたまひうれしくもおさなこ、
 ろにおもひたちておくへくたる物哉吉次吉内吉六とてきやうたい三人
 のものともかいふ事をわれらふし三人の物ともかいふ事と心へにしを

ひかしきたをみなみへともそむくへからす吉次かたちをかつきておく
 へくたり候へいとま申てさらはとて立かへらんとし給ひしかそよまこ
 とわすれたり日本こくのぬす人もか吉次かかわこにめをかけゆふさ
 り夜うちによせうつようしんよきにつかまつれわれふし三人の物とも
 もくさのかけにてくろかねのたてとならふすいとま申てうしわか殿^{とて}
 ちかへらんとし給ひしときみなもと御らんしてあら御なさけなやふ
 しはらくとおほせあつてよろひのそてにすかるとおほしめしりやうか
 んさめて御らんすれば御ゑいのそてとりつき申さてはゆめにてありけ
 る(一行判読不能)(左11)とてりうていこかれ給ひけりさるあひたう
 しわか殿たしかに御むさうのありつる物をとおほしめしものさしき
 におかへりあつてもよきにほひのはらまきをくさすりなかにさつくと
 めしこんねんとうのこしの物を一もんしにおさしありかうかひぬき出
 まくらとしひけきりの御はかせをわつそくにとうとをきゆんてのあし
 をさしのへめてのあしをきつとたてゆんての御めのまとろむひまには
 めての御まなこかてんしやうをはつたとにらんとてのいをしてこそふ
 されけれか、りけるところにあほのかはらによりきしてつかまつるぬ
 す人ともはたれくそまつゑちことしなの、さかいなるくまさかのち
 やうはんふし六人さすせんくわうしのなむ大ものいはからひのむま
 のせう五てうの与次さいくちの七郎はつたのきやうふかいつかみのわ
 し二郎まとをのそくはそらめくらよいにぬつたるなまあせをあかつき
 はしるけら二郎てんかくかくほにてともをまよはすきつね三郎おなし
 くいたち二郎ふしにはつとうしはんとうないいつのお山のやけしたの
 小六この人々をさきとして大將は七十人そのほかつかうこぬす人とも
 は三百人にはすきざりけりあほのかはらによりきしておうまく三えに
 うたせ大つ、たいへいをかきすへわれらかたからをのま、はこそ吉次

かかわこをのむなるにのめやうたへやもつともてまふつうたふつさ
かもりするすてに其夜もやはんはかりの事なるにくまさかのちやうは
んはどうさいのなりをしつと、しつめめん／＼はなにとさたむるしさ
いによつてさけをはまいるそいて／＼ちやうはんかぬすみしはしめし
ゆらいをかたつてきかせんさてもそれかしやおやにて候物はゑちこと
しなの、さかいなるくまさかと(左12)いふところにてほとけのやう
なるまくうとなりわれらはいかなるふつしんのはからいによつて七さ
いのとしおかのかうといふところにておちのむまをぬすみとつてなら
ひのい、たのいちにてうつたるにちつともしさいかさうすそれよりも
ぬすみにはもともいらすよきあきないとおもひさため日本國をはし
りまわつてぬすみをするに一ともふかくをか、すされはそれかしは子
を五人もちたる大郎はひるかんたうかしやうす二郎は夜うちかしやう
す三郎はしのひか上手四郎はよくむまをぬすみさう五郎は人をかへと
とりてあのだとしまにてうるにちつともしさいかさうすきやつはらと
もはみないちこすきうするのうをもちて候かた、しと申に今夜ちやう
はんかむねこそさわけあつはれ三百七十よ人か中にさいかくまわつた
る人やましますあのきみのちやうへうちこえ吉次かやとをそつとみて
やかておもとり候へたれたれと申ともいつのお山にやけたの小六な
にかし見てまいらんといふま、にかきのす、かけしかまのときんまゆ
はつかにひつこうてあふはかのちやうへの、めきか、つて大おんあけ
てよはわるそも／＼くまのさんの山ふしかふつ(左13)(一行判読不能)
おくまつしまへくたるなり山ふしは十人にあまつて候今夜一夜のほい
たうたへやつとよはわつてうちのけこをしつかに見てとをるや、しつ
かに候ひてうちよりもよねのたはらをなけ出す小六きつとみていや物
ゑのかといてになわか、つたる物とおもひこしのかたなをぬいてか

けなわはらりときつてよねをすこしとつてあをのかはらにはしりかへ
つて中さにとうとゐて二のいきほつとつくちやうはんこれを見ていか
にやけた殿なに事がある小六うけたまわつてさん候八十四のかわこ
をきりとこのわきにつんたるはた、たからの山のことし四十二ひきのさ
うた三ひきののりむまいつれもよきむまにて候四十二人のひやうしの
ものゆみやなくいたちかたなをおつとりそへようしんするかほには見
えて候へともれいのとうつきをあつる物ならはきやつはらともはみな
ゑんのしたへかくれうすむまもかわこもやす／＼とらふすかこ、に
大事か候ちやうはんきいていまにはしめてやけた殿の大事とはなに
事ぞ小六うけたまはつてまつかたらせてきこしめされよいにしへはつ
れてもくたらぬ十六七なるしよくわんか候かこのわつはかいしやうの
ていそつと見たる所はいろもしろくしんしや■■かたにはとんき
んといふ物をきて候きたるひた、れは(左14)日本のきぬにても候は
すからきぬをもつてちをは山はといるにひとはけはいて十八五しきの
いとをもつて物の上手かぬい物をあり／＼とぬふて候まつゆんでのひ
ほつけにはいかきとりぬしやたんをぬいめてのひほつけにはたけくら
へにすきを三ほんぬふてけんしのうち神しらはと十二のかいこをか
いそたてはふしとはしをくいちかへはつとたつてはさつとはおりまひ
あそんたるいわひの所をあり／＼とぬふて候さてうしろのきくとちに
はきた山殿のさんさうすみよしのすいひんおむろの御所のけいきをあ
り／＼とぬふて候さてうしろのはかまをくたりにはしくうせいぐわん
をまなうたうとのましも千ひき日本のましも千ひきたうとのましは
大こくなれはとてせいを大きくおもてをしるくぬふて候日本のましは
せうこくなれはとてせいをちいさくおもてをあかぬふて候日本とた
うとのしほさかいちくらかおきといふ所にてたうとのましは日本へこ

さんとする日本のましはたうとへござんとするござうござしのかまの
さうの所をはあふあり／＼とぬふてさうさてはかまのけまはしいわに
松つるにかめいせきにかゝる川やなきをきのなみかとうとうつてさつ
とひいてゆくしほをかいをぬふてさうきたるはらまきのけはもえき（二行
判読不能）（左15）（一行判読不能）さくるかこのくさすり八十二まい十
二まいのくさすりにしろかねこかねをもつてやくしの十二神をいかく
とあらはすさいたるかたなはみなこかねつくりなりとつつけさやくち
にくりからふとうみやうわうたきつほへとんておりけんをのうたる所
をあり／＼とほつてさうおもてのめぬきはふとうのたいうらのめぬき
はくらまの大ひたもんの御しんたいをあらはすさけをにはほけきやう
の七のまきやくわうほんをみなかくんてさけてさうもつたるたちは
二しやく六寸か七寸かとおほへたりせつはも、よせうむとうかかふと
かねまことのめぬきそらめぬきせめしはひきいしつきにいたるまでし
やうほんのこかねをもつてひかめきたつて見えてさうきたるゑほしは
六はらやうのたうせいむきのつふのちつとあららかなるをひとくせみ
くせませひなかにあひをあらせくしかたをいかく／＼とひとためく
てひたりへおつたゑほしなりひんのかみはちしんたりまゆのけはかつ
たりきのふかけふかの山出このわつはかありさまを物によく／＼たと
ふれは木ならばしたん鳥ならばほうわふかねならばしやきんむかしを
とるならばけんしの大しやうたうせいをならばきよもりむねもりの御
きんたちてましますかけいほの中にくまれあつまときいて吉次をた
のふておくへくたるとおほへたりこのわつはかめのうちをた、一め見
てさうかゆたんする物ならば三百七十よ人のぬす人のほそくひはたす
（左16）かりかたくおほえたりちやうはんき、やけた殿の物語はさう
／＼きもさんせぬ事にて候其わつはかなにともはやらははやれれいの

ちやうはんかはうをもつてた、一うちのしやうふさうよ夜はなん時そ
八つのころときはよいにうつたてうけたまはると申ててんにたいま
つとほしつれあふはかのきみのちやうへの、めきか、つてをしよする
さるあひたくまさかの太郎はれいのとうつきをとつてとう／＼とあて
たみなもときこしめしあわ夜たうよとおほしめしわざとおもてのしと
みを二三けんとつてゑんよりしもへなけおろしよするぬす人いまや／＼
とまちさせ給ふくまさかの太郎はくろかわおとしのとう丸きかみをは
つとみたいてなきなたひきすつて人はなひそた、まいれやうまいれや
まいれとけしをなすみなもと御らんしてきやつはくせ物かなきらはや
とおほしめしはしりか、つていかつちきりとなつてちやうときつて
御らんすれはむさんやな太郎はあへなくひをうちおとしてくひはう
ちへころひければとうはそとへそたをれたるくまさかの四郎かいそき
はしりかへつていかななふちやうはん太郎殿こそておうてましませち
やうはんきいていたてかうすてか四郎うけたまわりていたてやらんう
すてやらんくひかうせてさうはこそちやうはんこのよしきくよりもむ
ねんのしたひかなそのわつはにてなみ見せんといふま、に八しやく（左
17）五寸のさてもほうをはくきなかにおつとりのへみなもとにわたり
あふみなもと御らんしてちやうはんかはうをは一しやくおひてはつと
と切二しやくおひてはちやうときつててもとはかりのこされたり三百
七十よ人のぬす人みもとをまん中におつとりこめ火水になれともうた
りけりみなもと御らんして玉になれたるほうらいのとりのおせいもか
くやらんおとろくけしきもましまさす大せいの中にわつて入にしから
ひかしてきたからみなみくもてかくなは十もんし八つ花かたといふ物に
わりたておんまはしさん／＼にきつてまわるてんはうすまいてちはあ
けにそめかへれうか水をえ雲をわけこくうへあかることくなりいまた

ときもうつさぬまにくつきやうのつわ物を八十三ききりふせたりちやうはんこのよし見るよりもせひそれかしてなみ見せんといふまゝに六しやく三寸のさてもなきなた水くるまにまわいてみなもとにわたりあふみなもと御らんしておゝのかたきにわたりあひほねはおつたりけにやちやうはんあらてのむしやなり大なきなたにてたゝきたてられうけたちになつてきつゝとひき給ふちやうはんこれを見てあわひそとこゝろへすまなくうつてかゝりけりさるあひたみなもとそうしやうのかけにてならひしきてもてんくのほうは出合所とおほしめしきりのほうをむすんてかたきのかたへなけかけこたかのいんをむすんてわか身にさつとうちかけちやうときつて御らんすれはむさんやなくまさかまつかう二つにうちわられあしたの露ときへにけりそれよりもみなもとおくへくたらせ給ひて天下をおさめたまひけり（左18）

A reprint : Eboshiori-Byobu owned by the Tezen Museum

OGAWA Yoko
(Matsue College of Technology)

[Abstract]

“Eboshiori-Byobu” owned by the Tezen Museum is the screens, which was a Nara picture-book originally. This is a reprint of the screens.

Keywords : screens, Nara picture-books, Tezen Museum